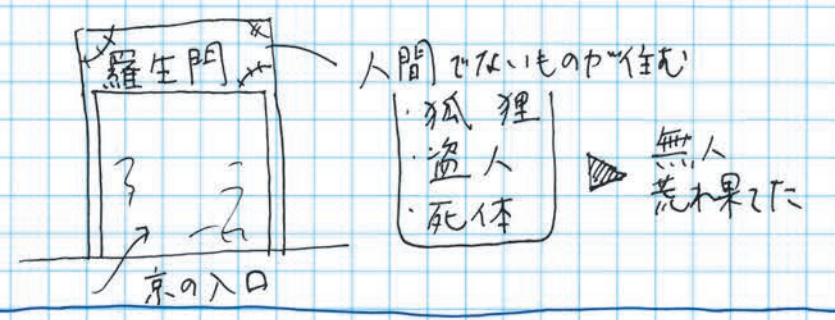
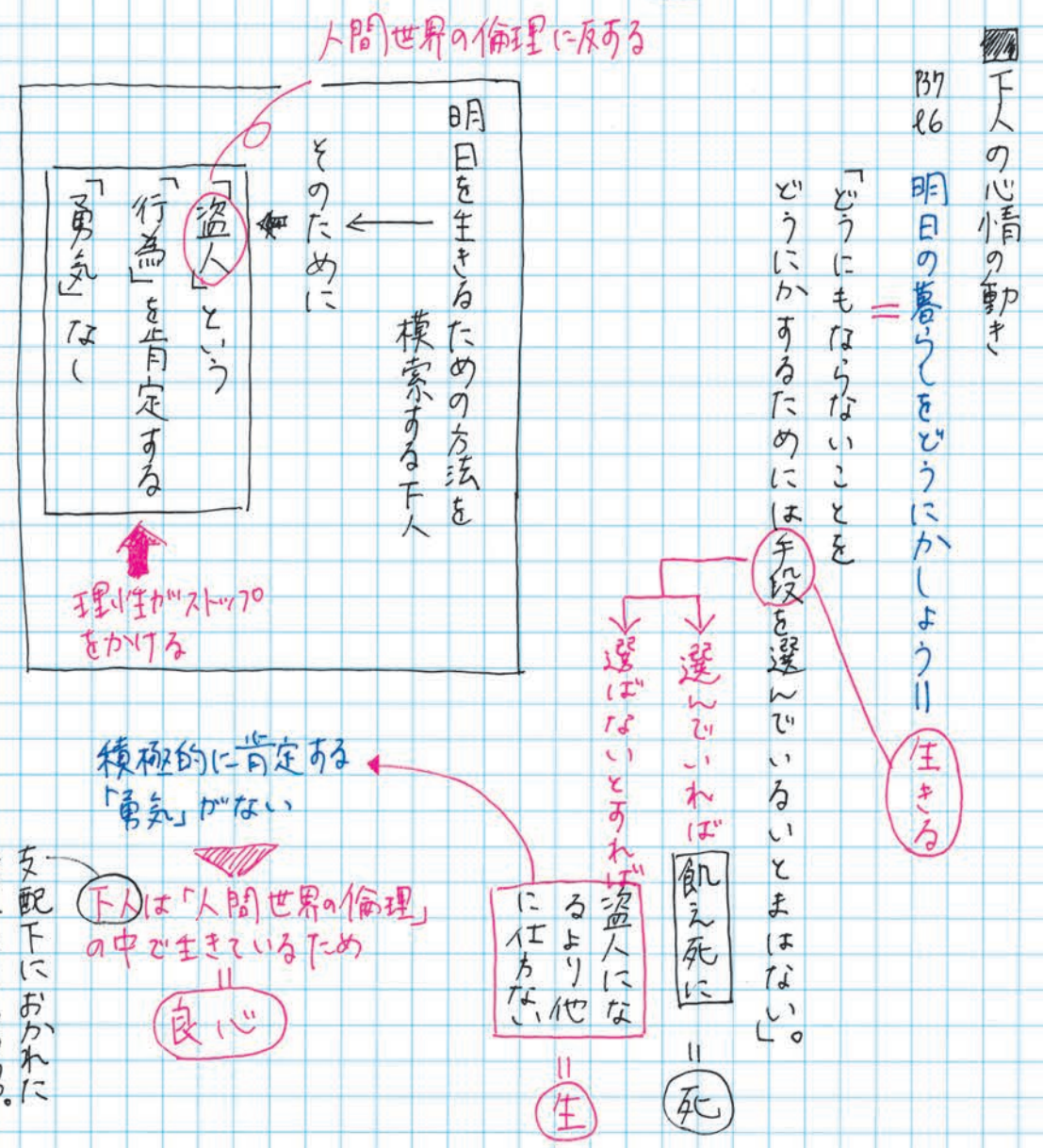


羅生門
芥川龍之介



- ポイント
- ① 「老婆に対する「下人」の心情の移り変わり」と「行動の変化」を押さえる。
 - ② 人が寄り付かない羅生門になぜ、下人がいるのか? にフォーカスする。
 - ③ 「老婆の存在」が「下人」にある「変化」を促す→「盗人」になる「勇氣」をもち「行動」へ。

- ・ 災い (わざわい)
- ・ 顧みる (かえりみる)
- ・ 殊に (ことに)
- ・ 据える (あえる)
- ・ 衰微 (あいつ)
- ・ 余波 (よは)
- ・ 憂え (うれえ)
- ・ 草履 (ぞうり)
- ・ 棲 (ろう)
- ・ 濁る (にごる)
- ・ 腐乱 (ふらん)
- ・ 臭気 (しゅうき)
- ・ 暫時 (ざんじ)
- ・ 揮ひ (すお)
- ・ 語弊 (ごへい)
- ・ 鋼 (はがね)
- ・ 成就 (じょうじゅ)
- ・ 悔意 (かいぎ)
- ・ 恨む (うらむ)



登場人物

老婆	下人
・ P41 「鶏の脚のよう……」	・ 四・五日前に「暇を出された」
・ P39 「猿のよう……」	・ 人に流されやすい
・ P42 「肉食鳥のよう……」	・ 心の動きが激しい
↓ 郵物に例えられることが多い	・ 盗人 on 「死」で悩む

洛中にいた

洛外にいた

状況

- ・ 秋の終わり、暮れ方、たった一人、下人、雨やみを待つ
- P34 「洛中のさびれ方は一通りではない」
- ・ この男の他に人がいない。
- P36 「この二・三年京都には地震とか辻風とか……」
- ・ 洛中の様子(日記による)
- ・ 仏像や仏具を薪にして売っていった金にかえる
- つまり洛中は、

人々の倫理観の崩壊
権威の衰退

※下人 = 貴族などの屋敷に住みこみで働く
使用人(奥に、身分低い)

Check!

老婆の論理	下人の論理
・ 人間(良心)	・ 人間(良心)
・ 老婆	・ 下人
・ 死者(愚者)の	・ 老婆(愚者)の
・ 髪毛が反く	・ 着物をよぐ
↓ 正当化	↓ 正当化

情景描写と下人の心理の重なり

- ① 雨の降り方
晩秋のしやうの降り方
・ 下人の心は焦燥的な気分と迫り迫る
- ② 夕闇
下人の心は不安に
- ③ 重たく薄暗い雲
下人の心は絶望的に

＜描写の効果＞

- ① 若い男
- ② 生身人間
- ③ 今も変わらぬ若さ(生)の象徴

「石のほおにできた、大きなキズ」

京都で地震他
↓
京の町が衰微
↓
主人の家衰退
↓
長年働いた下人
↓
下人のクビは当分?

主として
は小さなこと
強者=生

下人として
生死にかかわる
大事件
弱者=死

Check!

赤い空 ↔ 黒いカラス

赤い血
危険
情熱
生

黒い夜
闇
恐怖
死

生(死)